

第二部 チンランの世界

第1章 チンラン

1-1. あなたは人の肉を食べるのですか

それは、下宿を始めて1週間ほど経ったときのことだった。近所の少年がウシの放牧に行くというのを聞き、牧畜について質問するよい機会だと思った筆者は、一緒に同行させてもらった。

家の周りの畑を通り抜け、木や雑草が茂る林に入り、しばらく一緒にウシを追う。一服しようと思つたところ、向かいに見える山を眺める。すると、少年が急に真顔になって、「あなたはチンラン（人喰い鬼）ですか」と訊いてきた。「チンラン?」。聞き慣れない言葉に答えに詰まると、彼は「人の肉を食べるのですか」と続けざまに訊いてきた。

「とんでもない、人の肉を食べたりしませんよ」と筆者は思わず苦笑しながらも、誤解されては大変と慌てて返事をした。彼の顔を覗くと、安堵の表情が浮かんでいるように感じた。筆者はさらに「なぜ、そんなことを」と訊き返す。「あなたがはじめてこの村に来たとき、村の年寄りたちが、あれはチンランだ、人の肉を背負っているんだと言っていたんです」。

プラジャの人びとの村を予備調査と称して最初に廻ったときのこと頭をよぎる。筆者の姿を見て家のなかに駆け込んだ人、逃げ遅れて泣いた子供。家のなかに話し掛けても全く出てこようとしなかった人。このような人たちは、筆者をチンランとして恐れていたのだろうか。

加えて、バザールの人から聞いた話が頭のなかで蘇る。「開発のために私たちが始めてチェパンの村に行ったときには、彼らは怖がって森に逃げていたんですよ」。

あとになって考えてみると、このような想起とともに、筆者はこの人たちと自らの差異を強調し、人びとを自らが描く二項対立的な構図に押し込もうとしていた、と言える。他者を怖がらない自分と、他者を恐怖する人びと。人慣れし洗練された存在と、人慣れしていない素朴な存在。この出来事をこうして自らの象徴世界における特定の場所に位置づけてしまえば、プラジャの人びとにとっての象徴世界に通じることはできなくなる。そうした世界に向かうためには、プラジャの人びととともに過ごした生活の記録や記憶を辿り、チンランとはどのような存在なのか想像していかななくてはならない¹。

今一度、フィールドに入ったときのことを思い起こしてみれば、皆が皆、こうした態度だったわけではないことがわかる。いかにも人慣れした感じの何人かの中年男性は、言葉の語尾の音調を下げる物腰の柔らかな口ぶりで、笑顔とともに歓迎の意を表しつつ迎え入れてくれていた。初対面の筆者にハン (han C.) と呼ばれるどぶろくを振る舞ってくれ、ひとしきり会話に付き合ってくれる人もいた。

筆者を怖がっていた人たちも、のちに打ち解けた雰囲気では話ができるようになった。

当時の話をあらためて訊いてみれば、筆者をチンランと断じていたわけではないことがわかる。

あなたもすっかり馴染んで、ここの人間のようになったね。最初に来たときには見たこともない真っ赤な布袋（ザック）を担いでいたから、あれは泥棒で、盗んだものを入れているんだとか、その袋がちょうど人間のかたちのように見えた（ウエストベルトが足のようだった）から、あれはチンランだと言って怖がっていたんだよ。あなたの足も毛深くてチンランのようだったしね。

このように人びとは筆者をチンランか泥棒かと考えたということで、チンランだと信じて疑わなかったわけではない。むしろ、見知らぬ者が見たこともないような格好をして歩いているのを見て、違和感や恐怖とともに様々な想像が広がった。そのなかのひとつがチンランだった、というところだろう。

ただ、ここでチンランという異人表象がもたらす他者性、つまり、チンランという人喰い鬼を自らの表象とされたときの驚きを、他の表象を思い起こすことで薄めてそれでよしとすることはできない。それではチンランとその背景にある世界を想像することに繋がらないからである。では、チンランとは何者なのか。どのような世界の住人なのか。それを探るために人びと自身によるチンランについての語りを取り上げていきたい。

1-2. チンランの物語

チンラン（人喰い鬼）について村の人たちにあらためて話を訊くと、今ではチンランはいない、と言う人が多い。それでも、つぎのようなチンランの話を聞くことができた。

昔カトマンドウへ交易に行ったとき、店の奥で人を解体しているのを見たことがあるよ。カトマンドウには、チンランがいるんですよ。今ではもういないらしいけどね（50代の女性）。

チンランなら会ったことがあるよ。このあいだ歩いて一日ぐらいのところにある森の伐採（焼畑のため）に行った帰り、夜遅くなって暗いなかを歩いていたら、一軒の家を見つけたんです。そこを通ると、なかから家の男が出てきて「寄って行きなさい。米のご飯もあるし、ジャガイモのカレーもあるから」と言って僕を誘ったんだけど、あれはチンランだよ。それで僕は「いいえ、結構」と断りながら、逃げてきたんだ（15, 6歳の少年）。

チンランの具体的な目撃談は、これ以外に耳にすることはなかったが、チンランの話をする「昔は沢山いた」という人がほとんどだった。そして、大抵、それに続けて昔いたチンランの話が語られるのだった。以下、いくつかあるチンランの話のうち、話の始めから終わりまで筆者が記録できた唯一の例をあげる。

ある鬼(ラッチェス)がいた。その鬼にある男が出会い、友達になった。鬼は、人を食べるチンランと言われていた。昔、隣村の山の尾根に住んでいた。

チンランはミジャール(mijār, mījhār N. 村役、徴税役)になっていた。当時、私たちの村と隣村とで、ダサインの祭の日には、そのチンランに村のことをきちんとり仕切るようにとティカ(tika P. cf. ṭikā N. 額につける印)をつけてもらいに行っていた。男はダサインの日に、ロクシ(raksī N. 穀物などの蒸留酒)を一瓶と用意できた肉、トリかブタの肉を持っていた。チンランのほうは(その返礼に)人の肉をととてもおいしく供した。(その人は)チンランと義兄弟になって、(ある日)贈り物にバナナを持って行った。

チンランは第二夫人として、私たちのような人間を飼っていた。男がチンランのところに行くと、ちょうどチンランも大きな竹カゴ一杯のバナナを背負ってきたところで、「おお、来たかい、義兄弟」と言い、バナナを(軒先に)置いて家のなかに入った。そして「義兄弟が来たんだから、何か出さなくては」と妻と話をし「義兄弟、2足を食べるか、それとも4足を食べるかい」と訊いてきた。男は、4足と聞いてヤギのことだと思った。2足はニワトリだと思った。そこで「どうして4足をつぶす必要がありますか。2足で十分」と答えた。チンランのほうは2というのを聞いて、乳房、それも人間の女性の乳房のことだと思った。

チンランは、第二夫人に「水を汲みに行つて、身体も清潔にして来なさい」と言い、川へと向かわせた。

第二夫人は、馬鹿にされては恥ずかしいと思い、きれいに全身を洗ってきた。

チンランはそのあいだ、鉄の棒を真っ赤になるまで熱しては研いでいた。その研ぐ音を聞き、義兄弟が「なかでシュワーシュワーって何の音がするんですか」と訊くと、チンランは「山鳥(lobhita cara cf. lobh N. 物欲)が鳴いているんですよ。聞いたことがないんですか、よく耳を澄まして聴いて下さい」と答えた。

そうしているうちに、第二夫人が帰ってきた。そして「さあ水を受け取って下さいよ」と言つて敷居に腰掛けた。チンランは熱してシュシュと音を立てる真っ赤な鉄棒を彼女の耳から突き差した。それが貫通すると、妻は痙攣しながら死んでいった。それを見た男は身体を震わせた。「こいつはチンランだ。私も食われてしまう。どうやって逃げようか。今逃げても追いかけて殺されてしまう」。男はそう考えて、しばらくじっと座っていることにした。

(チンランは)二つと言つたものとして、乳房を切り取り、手のひらにのるくらいの大さきの切れ端を器に盛った。そして、ご飯も一皿盛った。

「さあ召し上がれ」、「いいえ、結構です」。こんなやりとりが3回された。そこで第一夫人が「何でそんなに食べろって騒ぐのさ。あわてて食

べたら喉を詰まらせてしまうじゃないか」と言い、夫のチンランを遮った。

男は、人間の肉を食べられないままただ座っていたが、やがて指輪をはずして手の上でもてあそび始めた。そこで盛んに食べろと勧めていたチンランも（どこか他の部屋に行って）座った。そこで男は「さあ、逃げよう」と考え、「食事前の儀礼をしなくては」と言ってその場を起ち、近くにいた犬に自分の食事を与えた。そしてサッと家を飛びだし一目散に逃げ出した。

チンランが「ご飯を食べて下さいよ、義兄弟」と言っても、返事がない。再び言っても、返事がない。そのあいだに人は必死に急いで駆け、大きな木の虚のなかに隠れた。

チンランは「家ではもう子供たちがご飯を食べ始めている。せっかく肉を切ったのに、妻が余計な口を挟むから、（義兄弟が遠慮して食べなかったら、肉が）無駄になってしまう」と言って外を見た。すると、犬が男に出した肉もご飯も食べている。「畜生め。犬の野郎」と言いつつ、チンランは男を追いかけ始めた。そのうちに腰巻きも外れてしまったが、それでも構わず追いつけた、犬が木の虚の方へと向かい、やがて木の周りを走り、虚へ入ろうとした。（なかにいる男が）「ああもう駄目だ」とつぶやいた。ちょうどそのとき、チンランは犬に石を投げつけ、「子供たちから、肉を分けてもらわなくては。肉を食べに戻ろう」と言いつつ戻っていった。犬もそれを追ひ、帰っていった。

男もようやく家に帰ることができ、妻に言った。「おまえの言っていたとおりだ。あれは人間を食べるチンランだった。もう少しで殺されるところだった。何とか生きて帰れてよかった」²。

この他にもチンランの物語がいくつもあると言われており、筆者もその断片は何度か耳にしていた³。それにしてもこのようなチンランという表象は、どのような背景のなかで人びとに想像され⁴、語り継がれてきたのだろうか。

ここからは、チンランの背景世界を想像していくために、チンランの物語と切っても切れない関係にある「肉」が、生活のどのような場面に登場し、どのように語られているのか、探っていくことにしたい。

-
- 1 人類学者も記述の対象である他者を「人喰い」として想像し、その神話を創り上げてきたことは、アレンズ（1982（1972））が詳細に論じたとおりである。チンランに想像を巡らすだけでなく、「人喰い」と他者性が、様々な社会で結びつけられてきたことにも留意する必要がある。
 - 2 普段ネパール語で語られている話をフィールドワークの初期にネパール語で話してもらいテープで録音し、それを起こしたもの。なお、テープ起こしの際には東京農工大学大学院生（1998年当時）のSoubhagya Silwalさんの助力を得た。
 - 3 チンランには尻尾がある話、チンランが姉を呼ぶところから始まる話、チンラン同士がもつれ合って山から転げ落ちていく話などが聞かれた。
 - 4 具体的な食人の習慣についての話は聞かれなかった。